あそびの研究(2)

おもちゃと遊び文化史のなかの江戸

太田　素子

一、「遊ぶ子ども」の発見

「遊ぶ子ども」といえば、『梁塵秘抄』の「遊びをせんとや」の歌を思い出される読者も多いことだろう。十二世紀の今様のなかに遊ぶ子どもを高らかに歌いあげたものがあるということは、これからご紹介しようとする江戸時代の「遊ぶ子どもの発見」は、あるいは「再発見」なのかもしれない。つまり、遊ぶ子どもに対して大人が共感的な注目のまなざしを向けた時代が、古代末期から中世初期に存在したものの、一旦何らかの事情で消失し、江戸時代に入って再び新しい様相をおびて登場したということである。

筆者には中世史の素養がないが、『梁塵秘抄』の研究者である秦恒平氏（NHKブックス、一九七八年）や、中世史の横井清氏（『中世民衆の生活文

化』東大出版、一九七五年）は、「遊びをせんとや」の歌は「遊ぶ子ども」と「大人である自分」を区別しているという意味で、むしろ古代的な歌だとみなしておられる。そして、中世人はもっと大人自身が楽天的に、エネルギッシュに遊ぶ人々だと見ておられる。

たしかに大人と子どもが混じり合って働き、かつ遊ぶ中世社会においては、子どもの遊びだけを取り立てて注目するまなざしは生まれにくかったかもしれない。そう考えると、以下にご紹介するような、戦国末期から江戸時代初期におこった遊びに対する人々のまなざしの変化の性格が、より判り易くなるようにも思われる。

子どもの発達に即した教育を説いて、「東洋のルソー」という評価もある貝原益軒の『倭俗童子訓』に、「小児遊びを好むは、常の情なり。…道に害なき業ならば、あながち押さえかがめて、その気を屈せしむべからず。ただ後にすたらざる遊びはうち任せがたし」と述べている下りがある。

ここには、遊びを押さえ過ぎて元気を無くさせてはいけないとか、大人まで続いてしまう遊びはいけないとか、一読しただけではその真意を図りかねるような言い方がみられる。子どもの精神発達における遊びの意義を強調するような、西欧近代の遊び論とはかなりの距離を感じさせられるのは確かだ。

ところがよく読んで見ると、十七世紀半ばから十八世紀前半の子育て論には、同じようないい方がほかにも見つかる。中江藤樹は『鏡草』の中で、子どもの遊びはやりたいようにやらせた方が良い、成長すれば自然に遊ばなくなるのだから、と説く。十八世紀の稲葉宇斎になると、好色、利欲、闘争心を募らせるような遊びは幼いときから禁ずべきだが、弓矢や人形、こま、凧などは大人になったら止む遊びなのだから年齢を考えて許すべきだと、許容してよい子ども遊びを限定しようとしている（『幼君補佐

の心得』）。

このように見てくると、実は論者たちの趣旨が、大人の遊蕩を厳しく禁ずると共に子どもの遊びは大人遊びとは別物であって、それは大目に見てやらないと元気を損なうということに、大人たちの注意を喚起しようとしていることがわかる。近世初頭には禁欲的な生活態度が社会全体に広がりはじめたといわれるが、その中で子どもの遊びは大人遊びのように一律に禁止されるべきでないということが、改めて「発見」されてきたのではないだろうか。

そのような禁欲的な生活態度の一般化と子どもの遊びの承認は、儒教的な子育て論にみられるだけでなく、井原西鶴の写しだした町人的な世界でも同質の現象が見出される。西鶴は、前期の作品である『好色一代男』など一連の好色ものにおいては、都市の一画、廓という限定された世界で繰り広げられる上層市民の遊興やその美意識を描いた。ところが後期の作品、とくに『日本永代蔵』などでは無名の町人が日本有数の長者になり上がって行く際うみだされた禁欲的な処世訓が取材されている。

西鶴の作品に象徴されるような遊興と勤勉の分化は、実はその時代の人々の生活の中に普遍的に生じつつあった分化でもあったのではないか。遊興は廓という都市の一画に限定され、まじめな日常生活と空間的に区分された。また時間的にも、遊んでよい時期は、年齢段階でいえば子ども期と老年期、暦でいえば日常生活（ケ）と区別される祝祭日（ハレ）に限定されたのである。『日本永代蔵』巻二の京都室町の呉服屋の娘は、「八歳より墨に袂をよごさず、節句の雛遊びをやめ、盆に踊らず、…」と、その早熟ぶりをほめそやされている。この短い文章からも、七歳までは遊びを許される幼児期と感ぜられていること、遊びは節句と盆などハレの日に集中的に楽しまれるらしい事が窺われるのである。

以上のような「遊ぶ子どもの発見」に関しては、

フランスの社会史家P．アリエスがルイ十三世の日記分析を通して行った問題提起以来、日本でも研究が増えつつある。多様に出されつつある論点を、実証的な土台も固めながら整理して行く仕事が、今後必要とされよう。

二、おもちゃと遊び文化史の中の江戸

イギリスの民俗学者A．フレーザーは、①独楽やボール、凧など世界中に普遍的に見られるおもちゃと、②大人社会の社会的経済的変化を如実に反映して変化して行くおもちゃ、というようにおもちゃを二分している。その上で、②については古代の宗教的な儀礼と関わりのあるおもちゃとルネサンス以降のおもちゃ文化の発展史があとづけられている（和久洋三訳『おもちゃの文化史』）。そこには、子どもの遊びが間接的な仕方で大人社会の文化を反映しながら発展しているという視点がみられる。

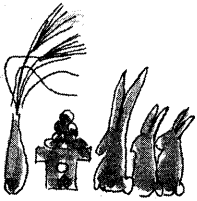
筆者が江戸のおもちゃ文化史との関わりで、特に興味を持ったのはヨーロッパで「人形の家」がおもちゃ文化史の中に有した特異な位置である。「人形の家」は、鑑賞用の美術品だから、子どものおもちゃ文化史の中に位置付けることに抵抗のある向きもあるであろう。たしかに「人形の家」は子どもの自発的な遊びの素材とはなりえない。しかし、それが鑑賞品として子どもも含めた人々の玩具や美術品に対する嗜好に与えた影響は甚大なものがあっただろうと思う。

かつてK．グーベールは、「人形の家」の初期のにないてであったオランダ自由市民について、「彼ら自らが畢境大きな子どもに過ぎぬ」と形容した。A．フレーザーもその指摘を受けて「あらゆる人の中に永遠に潜んでいる童心」の現れとみているが、自らの内なる童心の発見が、のちに子どもの遊びにたいする共感的な理解を深める契機となったと見ることもできよう。

人形の家の発達は、おもちゃを商品生産の対象として浮上させたし、おもちゃの技術的芸術的水準を高める上でも大きな貢献をした。そして次第に、子どもの自発的遊びにより適したおもちゃに展開して行く。十七～十八世紀の赤ちゃん人形、張り子もの、錫の人形、紙製のおもちゃ（着せ変え人形や紙の家）の発達など、より子どもの遊びに即したおもちゃ文化の開花は、ある部分「人形の家」によって用意されているといっても過言ではないのであろう。

実は、このようなルネサンス期のおもちゃ文化に関する記述が、江戸の雛人形の史的意義を理解する上でも示唆に富んでいる。人形の多様化や装飾性の増大、ままごと道具への関心、おもちゃの市場的価値の拡大、からくり玩具の流行など、総じて空想性や想像性が民衆と子どもの世界にまで浸透して来る江戸のおもちゃ文化史は、ヨーロッパの十六～八世紀史との「重なりとずれ」を解明すること、比較史的な視点で見てゆくことがとりわけ有効な対象であるように思われる。

ところで、このように子ども文化が大人の文化を間接的な仕方で反映しながら発展して行くという側面から見ていったときに、江戸時代後期の子ども遊



びの中で、ひときわ興味深いのがゲームルールのある遊びの浮上である。

先にも引用した横井清氏は、中世を代表する遊びとして、武力統治の時代にふさわしい力技（すもう、おしくらべ等）や、民衆の計数能力の発達を前提とする盤上の遊び、数とり遊び（碁、将棋など）をあげている。これら中世的な遊びは江戸時代の子どもの間でどのように引き継がれ、変容していったのだろうか。

まだその全体像は十分実証的に明らかにされているとは思えないけれども、江戸後期から幕末の遊技論――山東京伝『骨董集』一八一五年、喜多村信節『嬉遊笑覧』一八三〇年、喜田川季荘『守貞漫稿』一八五三年など――を読むと、戸外の力技は次第にかくれんぼや鬼ごっこなどルールを持つ集団遊びに比重を移していたのではないかという印象を受ける。とくに『嬉遊笑覧』などは、子ども遊びの採集に際して鬼決めの方法や罰則の採集などルールの些細なバリエーションを集めることに関心が向いているのだ。近世社会は、公事（くじ、裁判のこと）が一般化した社会でもあり、実は子どもの遊び文化の洗練も、あるいは大人社会のルールに関する観念の発達と関わりのあることなのかも知れない。

このように文化史としての子ども遊びの研究は、一面では人々の子ども観の研究であり、同時に大人の文化と子ども文化の関係史の解明をも課題として視野にいれる必要があるのかもしれない。

三、遊び文化史と幼児教育

F・フレーベルは、巷の遊びの採集と構成遊び用の作業具の創作によって、幼稚園教育の内容と方法を生みだした。特に後者は、遊びの素材を吟味することで、子どもの遊びに教育的な影響力を行使しようとしているのだから、子どもの遊び文化の歴史の中でも特筆されるべき大事件である。

このように大人が意図的な教育の対象として子どもの遊びを見つめるようになるのは、日本ではいつごろの事になるのだろうか。

近世の子育て書の中では、管見の範囲では上杉鷹山『輔儲訓』（一七七五年）のなかに「教育の対象としての遊びの発見」の最初の形を見ることができるように思う。鷹山は

「狂い楽しみ申さる事も、時としては十分これ有りたく候。その節は、面々も痛み入り候えども、年を忘れて相手致し呉れ候様に、頼み入り候」

「朝夕遊戯の内にも何一つ教えに非ざるはこれ無く…幼稚の相手を致し候は、戯言・戯動の上にも可、不可はこれ有る事」

と述べて、儒教的なしつけ教育の面から遊びの指導に言及している。

また、都市好事家の遊戯論の中では、山東京伝の記した『骨董集』に、

「正月男児にぶりぶりをもてあそばせしは、年始に農業のまねびをさせ、農事をすゝむる意なるべし」

とか、あるいは雛遊びは女児にとって家事を模倣する良い遊びだという具合に、遊びの発達的意義に言及しはじめているのが、時期の早い例である。後者は、模倣という子どもの発達心理への理解が注目されると共に、大人の仕事や労働につながる遊び文化が推奨されているという点で、健康な庶民性を現してもいるのかも知れない。

このように、次第に子どもの精神発達にしめる遊びの意義への注目は前進してくるとはいえ、遊びの質を高めるためにおもちゃの分析的な研究を進めるという幼児教育の思想は、日本ではついに自生しなかったのではないか。そのことが、明治期になって幼稚園教育を移植しようとつとめたとき、学校的な幼稚園にゆれてしまった一つの要因だったように思われるのである。明治の幼稚園関係者は、試行錯誤

を繰り返しつつ、「遊びの教育的指導とは何か」を発見しなければならなかったのである。

（郡山女子大学）

〈参考文献〉

○酒井欣『日本遊戯史』建設社　一九三三年
○有坂与太郎『日本玩具史』（上下）一九三一～二年
○同『日本雛祭史考』建設社　一九三一年『雛祭新考』思文閣出版　一九四三年

＊

○P・アリエス『〈子供〉の誕生』（杉山光信他訳）みすず書房　一九八〇年
○A・フレーザー『おもちゃの文化史』（和久洋三他訳）玉川大学出版　一九八〇年

＊

○本田和子『子どもの領野から』人文書院　一九八三年
○太田素子「近世子育て論への道標――十三～十八世紀武家家訓における幼児観と遊戯観」日本保育学会編『保育学年報一九八七年版』フレーベル館　一九八七年
○同「近世遊び文化と子どもへの教育関心」佐藤玩具文化財団編『玩具文化』三号　一九八八年
○同「遊ぶ子どもへの注目と共感」木下龍太郎他編『保育の思想』労働旬報社　一九八七年
○木下龍太郎「遊びの民俗学、習俗の遊び」『子ども百科』中央法規　一九八八年
○多田道太郎他編『日本の美学』第十五号（特集・遊び）ぺりかん社　一九九〇年
○森下みさ子「〈組上〉の世界――玩具からの発信」『舞々』十五号　舞々同人発行
○江戸子ども文化研究会編『浮世絵のなかの子どもたち』くもん出版　一九九三年